

# 隨泉寺寺報

2003年 11月号 第399号 Tel 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季門信徒講座

講師 浄土寺住職 麻生法樹師

講題 「いかされて生きる」

父のごと 秋はいかめし 母のごと 秋はなつかし

家持たぬ児に

石川啄木

明治四十一年九月に作られた歌です。

この頃の啄木は単身、東京で暮らしていました。

ふるさとを離れ、各地を転々とした啄木は、この時、東京の秋を感じつつ、ふるさとの美しい秋を思い浮かべるのでした。

秋は不思議とふるさとを思い出す季節です。田んぼが色づいたり、柿や栗の姿を見ると、懐かしいふるさとを思い出します。啄木も同じ思いだったのでしょうか。しかし彼にとってふるさとは、やさしいばかりではなく厳しいものでもあったのでしょうか。秋に続く冬の厳しさを、思っていたのでしょうか。その頃彼は残念ながら家がありませんでした。本当の帰る家が無いものにとっては、いかめしいものなのかもしれません。人生の秋に本当に還れる所を持たないものは、懐かしいというよりは、いかめしく不安なものでしょう。

## 11月の法座予定

- 11月 2日午後6時より……………本部役員会
- 11月 4日昼席午後1時より……………秋季門信徒講座
- 11月 4日夜席午後7時半より……………出張法座 出口宮原 集会所
- 11月 5日朝席午前10時より……………焚焼会法要
- 11月15日昼席午後1時より……………秋季門信徒講座

## ☆報恩講お参りの日程

各門信徒のおうちのお通りの報恩講のお勤めをいたします。

すでに瀬野川団地、鴨の巣団地、コモンライフ、中須賀、望ガ丘団地、は10月中にお参りいたしました。

桑原	11月 1日～5日	東長者原	11月6日～9日
西長者原	11月10日～13日	出口宮原	11月16日～21日
荒野	11月22日～25日	井原	11月26日～30日
上平原1	12月1日～4日	上平原2	12月5日～8日
平原東	12月9日～11日	平原西	12月12日～13日
高部	12月16日～17日	町外	12月18日～28日



予定ですので変更するかもしれません。具体的な日程は近じか役員さんに送ります。都合の悪い方は直接隨泉寺までお知らせください。

## ☆焚焼会法要 (11月15日午前10時より)

お参りに行ってよく頼まれたり、相談を受けることがあります。それは古い仏具やお寺からの新聞や、どこからかもらわれたお札等の処分についてのことです。また古い先祖の遺品など、なかなか処分するのに抵抗があります。罰が当たったら困る、あるいは粗末にはいけないなどと、なかなか焼いたり、捨てたりできません。



庭先で焼いてくださいとお勧めするのですが、実行できないようです。お寺で古いご本尊は本山に返します。その他の物は、お勤めの後、一緒に焼きます。古いお経本や位牌、御札、お骨が入っていた木箱、盆灯籠、また切れた珠数、古い仏具などです。陶器やガラス製品

プラスチックは焼けないので対象外です。切れた珠数や古い仏具は、仏具屋さんに引き取ってもらおうと思っています。

当日 (11月15日) お寺まで持参ください。

《おめでとうございます》 井原の樽田 久・みささんに次男陸矢さんが7月22日誕生されました。この頃子供の出生率が下がってきて平均1.5人だそうです。兄弟げんかができるのが子供の成長には大切なことです。兎にも角にも曾おばあちゃんのチサエさんが喜んでおられました。



# 平和の鐘



随泉寺に50年以上本堂の廊下の上に吊ってあったのですから、少し寂しさもありましたが、これからものお寺で、仏法を伝える働きをしてくださると思うと、これでよかったのだと思います。

洞光寺の住職 堀江晴俊さんから  
礼状と  
そのこ



ことを伝えた山陰中央新聞を送っていただきました。

約六十年ぶりに境内に響き渡ります半鐘の音に 先般の大戦経験者の方々には、ひとしおの音色ようでした。

先月寺報でお知らせしました喚鐘の引き取りに9月の27日 島根県の木次町の洞光寺の住職 堀江晴俊さんと総代の2人がみえました。

随泉寺の総代さんや門信徒会の役員の方々がたくさん、朝からお寺に集まってくださいました。

木次町を朝出発されたそうですが随泉寺に着かれたのはお昼前でした。それからみんなで、お別れの法要を勤めて、お見送りをしました。



謹啓 初秋の候 御尊台には御健勝の事と慶賀に存じ上げます。

さて 先般はご多忙の折り 拝登させていただき誠に有り難うございました。 壇中一同待ちに待っておりました半鐘をお迎えをして、先般十月十二日にお迎えの法要を当山役員の方々の参集をいただき、厳修させていただきました。

約六十年ぶりに境内に響き渡ります半鐘の音に

色々のご配慮を頂き誠にありがとうございました。  
壇中一同に成り代わりましてお礼申し上げます。  
尚、当日地元の新聞記者の取材があり、新聞記事を同封させていただきます。

平成 15年 10月 24日

大龍山洞光寺 住職 堀江晴俊九拜

随泉寺御尊住 鎌田哲成様

## 『祖父の死』

畝本 一行

梅雨明けの遅れた今年の夏は、見慣れた顔をひとつ欠いて迎えられた。私の祖父、畝本勝は病院のベッドの上で息を引き取った。そして私は、祖父の最後を看取ることができなかった。

祖父は変わり者だった。髪はとうに白くなっているというのに、健康のためにとゲートボールを勧められると、「年寄りくさいものはしない」とはねつけた。

テレビでは野球や相撲を欠かさずに見、毎日のようにパチンコへ出かけ、西瓜と二重焼きが大好きで、常々、「働いていないと暇で仕方がない。人間は働いていないとだめよ」と言っていた祖父は、活力にあふれた老人だった。祖父の死は老衰が原因ではなく、全身へ転移していたガンが原因だった。病室を訪れた日、もはや動けなくなった足に触れ、「どうしてこんなことになったんじやろう」と、涙を浮かべてつぶやいた祖父の姿が忘れられない。

ついこの前まで元気そのものに見えた祖父が、突如入院し、わずか1ヶ月足らずで亡くなってしまった。まるで現実味がなかった。悪い冗談にさえ思えた。身近な人の死は、私にとって初めての経験で、しばらく祖父の死を受け入れることができなかった。たとえ、祖父の葬儀が終わっても、「自然に生きる」のは仏教的な考え方だが、言うほど簡単ではない。

私が祖父の死を受け入れるには、何らかのきっかけが必要だった。そんな時、ご住職から祖父について書くように頼まれた。私は、これがきっかけになると思い、感謝した。故人に対して私がしてあげられることは、ほとんどなにもない。しかし、祖父の死はとても悲しいことだけれども、いつまでも心の中で拒絶しては、なくなった祖父に悪いだろうから。

